

九州伝産の旅

vol.10

2022 年

三川内焼

平戸洗祥団右工門窯

<窯元紹介>

平戸藩御用窯の創立時の陶工の一人・中里エイ（高麗姫/こうらいいば）を祖とする直系の窯であり、元和8年に開窯。白磁に青色の呉須（ごす・顔料）で描く染付を主として、平戸菊花飾細工（ひらどきっかかざりさいく）を用いた装飾品をはじめ、蕪（かぶら）の絵柄を代表とする日用食器も多数制作している。

昭和天皇御成婚の御大禮式典に嘉納の栄誉を授けられ、昭和3年からは宮内庁御用達の窯元となる。また、平成27年に開催された第29、30回三川内焼窯元はまぜん祭り特別企画にて、実行委員会を代表して「平戸細工気球船形水注」をオランダ国王陛下に献上。伝統を守りながらも、常に新しいものづくりに挑戦している。

みかわちやき ひらどこうしょうだん えもんがま 三川内焼 平戸洗祥団右工門窯

三川内焼の歴史を紐解きつつ

「人の匂い」が感じられる作品づくりを

歴史的なものと陶工の作業場が混在する三川内。緑豊かで、神社や昔ながらの細道などが残っており、のどかでありながら風情があります。三川内焼の歴史を守りながら、ご家族4人で作陶されている「平戸洗祥団右工門窯」の十八代中里太陽さんにお話を伺いました。



中里さんご一家（一番左が十八代中里太陽さん）



高い煙突が特徴の工房



平戸洗祥窯の商品

■三川内焼の歴史・特徴

三川内焼は良質の天草陶石にコバルト色の呉須下絵を染め付けた磁器や、唐風俗の子供数人が遊ぶ「唐子絵」等が特徴です。豊臣秀吉が朝鮮に出兵した文禄・慶長の役の際、平戸藩の領主・松浦鎮信は、朝鮮の陶工を連れて帰りました。その一人である巨関（こせき）は、現在の長崎県平戸市に開窯しました。また、同時期に佐賀県北部に朝鮮からの陶工によって唐津焼が誕生しましたが、陶工の一人中里エイは、巨関に招かれて唐津から三川内に移住し、現在の三川内山に開窯しました。その後、平戸藩は、1637年に御用窯を開窯。1662年には原料が揃い、磁器生産が本格化しました。平戸藩の篤い保護下にあった御用窯は、採算を度外視して技術の粋を極めた細工ものや茶道具などをつくり続けます。1831頃には、輸出が始まり、みかわち焼の技術は瞬間にヨーロッパで高い評価を得ました。明治になり廃藩置県のものち、御用窯は民窯となりました。明治後期から昭和前期には、数々の名工が登場し、輸出用の洋食器や国内向けの高級食器が盛んにつくられ、国内でも有数の産地へ育っていきました。※三川内陶磁器工業協同組合 HP より引用・編集。

Q.「平戸洸祥窯」の商品の特徴は？

天草陶石を使って、白磁に青色で描いた染付を主体に製作しています。特徴的な技法は「平戸菊花飾細工技法（ひらどきっかかざりさいくぎほう）」と「平戸置上技法（ひらどおきあげぎほう）」です。「菊花飾細工」の菊花は先端の尖った竹の道具で土の塊から、つぼみや葉などは手びねりや押し型成形によって形作り、器に貼り付けていきます。成形から焼形までの綿密な計算と高度な技術が必要で、長崎県指定無形文化財に指定されています。また、「平戸置上技法」は土を塗り重ねて絵柄を立体的に表現する技法です。「平戸置上技法」の技法は昔から三川内にありましたが、しばらく製作されていませんでした。近年復刻しましたが、伝統技術を掘り起こすことで新たな価値が出るものもあると感じています。



「平戸菊花飾細工技法」を使った作品



「平戸置上技法」の技法を使った作品

Q.海外展開にも力を入れているのですか？

コロナ前はドイツ国際見本市に出展し、平戸菊花飾花瓶が「トレンド2018」に選ばれました。また、英語版のホームページを作成したことをきっかけに、海外からの問い合わせが増えています。例えば今年、ニューヨークの大手化粧品メーカーからサプライヤーとしての依頼のお話がありました。海外には「菊花飾細工」をメインに技術を見せながら、三川内焼を知ってもらおうきっかけになればと思っています。「何でもできる」ではなく、「これだったらできる」にフォーカスしてPRすることを意識しています。

若い頃に九州電力(株)様の若手工芸家国内外派遣制度に応募してオランダへ留学した経験があるのですが、現在の海外展開の取組に活かすことができていると感じています。



海外向けのリーフレット写真

Q.オンライン販売にもいち早く取り組まれているんですね。

ホームページの整備と併せて約 10 年前にオンラインショップを立ち上げました。コロナ禍でオンラインショップを通じた販売は増えています。

Q.産地における最近の取り組みを教えてください。

毎年 5 月に開催される「三川内焼窯元はまぜん(※)祭り」の実行委員長として、現在「平戸盃（ひらどさかずき）プロジェクト」に取り組んでいます。盃の共通形 360 個と自由形 36 個にそれぞれの窯元が絵付けや細工をして販売するものです。寛文 2 年に三川内の陶工が天草陶石と出会い、今年で 360 年となり



ます。そのような節目の年に 36 回目ははまぜん祭りが開催されるということで、「豆皿」に続くシリーズとして企画しました。盃としてだけでなく、料理の器としても広く使っていただけます。まだスタートしたばかりですが、メディアにも取り上げられ、反響を頂いています。

※はまぜん・・・窯で焼成する際、収縮によるゆがみを防ぐため、器と同じ素材で作られた円形のものに乗せて焼きます。この円形のものを「はまぜん」と呼びます。

Q.中里さんのモットーを教えてください。

製造から販売まで、「三川内らしさ」を最も大切にしています。また、その「三川内焼らしさ」をどのように伝えていくかが重要だと考えています。あとは人のあたたかみや匂いが感じられるような作品づくり、使い手に寄り添った作品づくりをを心がけています。単に「手作り」だから良いということではなく、「その次に何を伝えたいか」ということを意識するようにしています。最近の取組としては、例えば、年齢を問わず誰が持っても持ちやすいような取手のマグカップを製作しました。



Q.今後の目標は？

三川内焼の歴史はまだ曖昧な部分があるので、大学等とも連携してしっかり調査し、歴史を紐解いていきたいですね。技術の背景にある歴史・ストーリー性が三川内焼の価値を上げ、プラスに作用すると考えています。以前、九州国立博物館で「みかわち焼展」が開催されたことが、学者の方が三川内焼をテーマとして取り上げるきっかけになりました。国立博物館や美術館での展示会を今後も増やし、さらに研究が進んでほしいと思っています。

profile

窯元名

平戸洸祥団右門窯

場所

長崎県佐世保市三川内町 889

電話

0956-30-8606

休日

不定休

営業時間

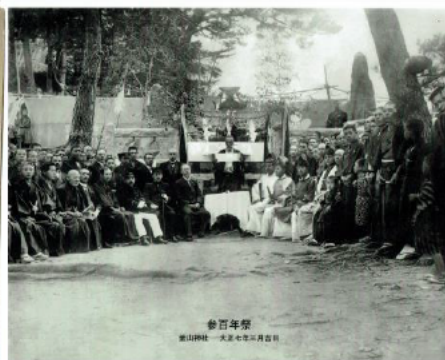
9:00~17:00

Web サイト

<https://www.kohsyo.co.jp/>



旧工房での作陶



開窯 300 年祭の様子

Q. 三川内焼の魅力、三川内町の魅力を教えてください。

三川内焼は白磁が特徴ですが、ただの白磁ではなく、奥行きや深みを感じられるところが魅力だと思っています。繊細な絵付けも特徴ですが、単に繊細というだけではなく、柔らかさや優しさ、ぬくもりなど、人のあたたかみが表現されている点が魅力だと思います。三川内町は、昔の町並みが手を加えられることなくありのままに残っており、他にはない魅力があるのではないかとと思っています。例えば、参道の道幅は江戸時代から変わっておらず、陶祖神社等、陶磁器にまつわる神社も多いです。観光地化された焼き物のためだけの町としてはではなく、「人の気配」がするありのままの町として、今後も残していきたいです。個人的には特に海外の方々に三川内を訪問してもらい、町の魅力を知っていただき、その良さを発信してもらうことで、日本人の観光客も増えるのではないかと考えています。



三川内焼や産地の「ありのまま」の魅力を追求し、国内外に発信されている中里太陽さん。伝統を受け継ぐということの重みと奥深さが伝わってくる熱いお話でした。「人のあたたかみや匂いを感じられるような作品づくり」という言葉が印象的で、「手作りだから良い」のではなく、その先に伝えたいメッセージを作品に込めているからこそ、海外も含めたファンを獲得されていらっしゃるのだと思いました。